



この原稿を書いている今は大震災から約2週間が過ぎようとしている。まだ情報もなく電気も水道すらも届かない地域もある。大惨事の被害状況が徐々に明らかになっていく。福島原発の問題も予断を許さない状況が続いている。物理的被害はもちろんのことであるが、大地震・津波の恐怖を体験し、肉親を失った被災者の心の傷はいかばかりであろうか。さらに日本は放射能漏れという見えない恐怖にさらされ続けている。

東北地方太平洋沖「大地震」

情報広報部長

とするばかりであった。被害の甚大さを理解するにつれて次第に、マスメディアの流し続ける膨大な衝撃の映像に圧倒され、被災していない人々でさえ精神的に押しつぶされそうになった。四六時中あの惨状を見続けているとあたかも実際に体験したような錯覚に陥ってしまうのだろうか。また「惨事をただ眺めているだけではないのだろうか」と気分が落ち込んでしまうのだろうか。地震発生以来、物音が過敏になった、突然動悸がする、気分がすぐれない、落ち着かない、何もしたくない、急に涙が出てくる、そんな症状の方が地震後多く見受けられる。

もしその現場に遭遇していたなら想像を絶する惨状を目の当たりにしたであろう。画面

には映らない目を覆うような悲惨な光景、事実もたくさんあったに違いない。それらの事実は視聴者には示されず、意図的に抑制的な報道が続いている。しかし死の世界を垣間見た被災者の精神的外傷は計り知れない。感情は麻痺してしまい、生きている、という現実さえ信じられなくなっているのではないだろうか。

被災地では何一つ暴動も略奪も起こらないことに対し、外国のメディアは賞賛と驚異の賛辞を贈る。「少しも節度、冷静さを失わない日本人に世界の視線は一変した」とも報道している。仙台で被災しやつの思いで札幌に帰ってきた方の体験を聞いた。被災地では

山科 賢児

そして被災者の強さに心打たれる。東北の人たちは我慢強く、粘り強く、寡黙で真面目な氣質を持つていると言われる。今回の震災を静かに受け止めることができたのは、いわゆる東北人氣質が影響しているのかもしれない。わめき散らしたり、感情をコントロールできなかつたりする人を映像で見たことがない。みんなじつと耐えているように見える。そして感謝の言葉をいつも口にしている。「日本人は忍耐強く、素晴らしい」と海外メディアが報道する所以であろう。

地震後1週間くらいからようやくライフラインの復旧も始まり、被災者の方々が懸命に生きていこうとしている声を聞けるようになった。支援物資の輸送、義援金集め、ボランティア運動が活発化している。その盛り上

がりが続くように願いたい。マスメディアや識者たちは「このままでは日本はダメになってしまう。被災された人々が苦しんでも必死に生きようとしているのだから、我々も元気をださなければならぬ」と訴える論調が多い。助けなければならぬ立場の人たちが、気落ちしては何にもならない。この未曾有の震災をバネにして、日本再生をやり遂げなければならぬ。

だが人間はそんなに早く立ち直れるものだろうか。耐え続けることが必ずしも最良とは思わない。今は、無理することはないのでないだろうか。感情を押し殺してがんばってみても、決してよいことではない。よい考えも浮かばない。むしろ自分を責め、自分の境遇を悲観するばかりになる。そのようなときは、素直に自分の感情を表に出すことである。大きい苦しみは自分の外に出してしまうことである。少なくとも被災者の方々は、悲しいときは悲しい、寂しいときは寂しい、泣きたいときは泣く、それが必要ではないだろうか。そして思っていることを伝えてほしい。復興は早いのがいいに決まっている。一刻でも早く安心できる日常生活を取り戻してもらいたい。しかし心に余裕がなくがんばり過ぎると身体に必ず無理が来る。緊張の糸が切れ、ほっとした時が恐ろしい。愛する家族を失った今、頼れるなら誰にでも頼ってほしい。迷惑をかけるから、心配をかけるから、といって遠慮しないでほしい。苦しさ、悲しさを心に抱え込まないでほしい。今、日本の国民の気持ちは一つになっている。そんな時こそ、我慢することなく、感情のおもむくまま甘えてほしい。誰もが我がことのように思い、援助の手を惜しまないだろう。辛い時はお互いさまである。日本は今も満更捨てたものではない。